

順応条件が急変する時の視覚機能に関する研究

(研究期間：平成12年～14年)

任期付研究員：塚田 由紀(独立行政法人交通安全環境研究所)

総評(期待したほどではなかったが一定の成果が得られた研究であった)

本研究は、視環境の変化に伴い順応状態が変化する間の視覚特性として、分解能、色覚の低下、視野の減少が考えられるが、これらの視覚特性を定量的に測定し、順応条件が急変する場合の人間の視覚機能に関する基礎的データを提供することにより、操縦士への教示並びに視覚援助施設の開発、計器類の表示法、表示色の効果の向上など、有効なシステムの開発等に資することを目指すものである。

本研究においては、視覚順応の速度、視野内での領域、属性の違いなどを明らかにし、一定の成果は得られているが、視覚表示機器の改善だけでなく、聴覚を応用するなどの広い視点も必要ではなかったかとの指摘もあった。また、論文発表など具体的な成果が得られておらず、所期の目標には距離があるため、目標が十分達成されたとは言い難く、ある程度達成されたと評価せざるを得ない。また、研究計画についても、所期の目標達成に向けて十分適切であったとは判断できず、ある程度適切であったと評価できる。

さらに、実験研究によってある程度の成果が得られているが、成果をどう活かすかが不明確であり、科学的・技術的な価値や波及効果が十分あるとは言い難く、今後の研究展開にもよるが、ある程度期待できるとの評価にならざるを得ない。さらに、現時点では原著論文の発表がなされておらず、定量的な成果も見受けられないことから、情報発信については行われなかったと評価せざるを得ないが、現在も引き続き補足データの収集を継続しており、今後原著論文を発表する予定とのことから、定量的かつ詳細な研究成果が積極的に発表されることを期待する。

他方、本研究における任期制の活用効果については、所期の目標に係る明確な成果が出ていない現段階においてその効果を判断することは難しい面もあるが、所属機関においては徐々に任期制が普及しつつある状況を踏まえると、ある程度効果があったものと評価できる。また、任期付研究員に対する所属機関の支援については、研究に専念できるよう必要な環境整備がなされているが、これまでの研究の進捗状況から判断すると、十分な支援が行われたとは言いが、ある程度支援が行われたものと評価できる。

以上により、本研究を総合的に判断すると、ある程度の成果が得られているが、所期の目標との距離は大きく、現在も研究が継続されていることから、今後の更なる研究の進展が期待されるものの、現時点では期待したほどではなかったが一定の成果が得られた研究であったと評価せざるを得ない。

<総合評価：c>

評価結果

総合評価	目標達成度	研究成果			研究計画	任期制の活用効果	所属機関の支援
		科学的・技術的価値	科学的・技術的波及効果	情報発信			
c	c	c	c	d	c	c	c